実はクララは、ピアニストのみならず作曲家でもあったのです。しかし、ある時期から、作曲を事実上断念してしまいました。もともと自分の作曲の才能に自信が持てなかったようですが、夫シューマンによって代表されるロマン派的音楽観を、クララ自身が次第に受け入れていったことが関係しているのではないかといわれています。

クララがキャリアを開始した当時は、華やかに技巧を競い合うような音楽が理想とされる時代でした。やがてその流行は去り、新しいロマン派の音楽観では、音楽を高邁（こうまい）な精神の産物とすることで演奏と作曲の分離がもたらされ、精神にかかわる創造的な作曲家は男性、それを再現する演奏家は女性（男性演奏家もたくさんいましたが）という役割分担が生じていったのです。クララが自作のピアノ協奏曲をコンサートで演奏した際、作品のできばえを認めたにもかかわらず、女性の作品だからまともに取り上げるに値しないとする批評家もいました。

クララ・ヴィーク＝シューマン
（1819〜1896年）

作曲活動に終止符を打った後、クララは夫の作曲した作品を広めるという使命感のもと、演奏活動を活発化します。そうして、「クララ・シューマンの夫」と呼ばれたローベルトの作曲家としての名声が確立され、今度はクララのほうが「ローベルト・シューマンの妻」と言われるようになったのです。

埋もれた女性作曲家たちに光をあてて

ルイーズ・ファランク
（1804〜1875年）

有名男性作曲家の親族として知名度の高いファニーやクララを生んだドイツの他にも、フランスのルイーズ・ファランク、ポリーヌ・ガルシア＝ヴィアルドなど、作曲する女性たちは大勢存在しました。では、なぜ彼女たちは音楽史の中に埋もれてしまったのでしょうか。

その理由の一つとして、近代の芸術家像と音楽史の叙述が、女性を排除する男性中心主義に偏っていたからということがあげられています。

作曲という行為には、創造性、独創性、想像力といった要素、言い換えれば天才が必要とされるが、そのように神格化した天才は男性の属性であり、どこまでも生物的に男性であって、女性の天才などありえない—こうした西洋文化史のレトリックが、女性の創造性を否認してきました。特に19世紀には、天才の姿が、エリートに評価される芸術作品と、大衆に人気のある消費のための作品とを区別する指標となり、高級文化が男性文化として、大衆文化が女性文化として思い描かれました。そのような思潮の中で、高級文化の象徴的存在が作曲家だとすれば、それが女性であるはずがないというわけです。

また、音楽史研究までもが著しく男性中心の分野で、研究者たちが女性の作品を過小評価したせいだとも考えられています。

ポリーヌ・ガルシア＝ヴィアルド
（1821〜1910年）

こうしたさまざまな偏見や制約のあった社会の中で、それでも情熱を持って音楽に取り組んでいた女性たち。彼女たちがその想いをどのように楽の音として紡いだのか、実際の作品に触れていただきたいと思います。

参考文献

『クラシック音楽と女性たち』
玉川裕子編著／青弓社（2015）

『女性作曲家列伝』
小林緑編著／平凡社（1999）

『表現する女たち』
三木草子、レベッカ・ジェニスン編／第三書館（2009）

女性作曲家に賭ける私の夢

小林　緑さん

東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、同大学院修了。
フランス政府給費留学生としてパリ第四大学留学。
現在国立音楽大学名誉教授。

「男に養ってもらうために教育したんじゃない、結婚なんか絶対にするな」娘4人に真顔で叫んだ父…私のすべての原点です。明治35年生まれの父がこの「暴言」を吐いたのは末っ子の私が高校生の頃でした。たった一人の息子にはほとんど興味なく、娘たちに音楽教育を施すのに必死でした。母もまた娘たちの自立路線には全面的に協力し、おかげで我が家では結婚や見合い話は一切出ませんでした。

私が女性作曲家に開眼したのは、クラシック・レコード編成者（現評論家）の夫が買い集めてくるレコードがきっかけでした。その中に多数の女性作品を見つけ、はるかに知名度の高い男性たちの作品と比べても、全く同等のすばらしいものであることを確信したのです。以降、「女性と音楽」をライフワークと定め、研究にも授業にもできる限り組み入れました。

演奏はもちろんのこと、音楽創造力に男女の優劣はないにも関わらず、日本の西洋クラシック音楽界で演奏されるのは一握りの男性作曲家の曲ばかりです。知らない曲を聞かせてその作曲者の性別を判別させようとしても全くわかりません。つまり音楽の創作力に性差などないことは、授業その他で確認済みです。

アーロン・コーエン編『国際女性作曲家事典』で、古今東西のクラシック系女性作曲家たちは少なくとも6、000人の存在が確認されていますが、今日ほとんど知られていないのはなぜでしょうか。この悲しい事態を解消するためには、実際に女性たちの作品を直接耳で確かめてもらうことが効果的と考え、さまざまなコンサートを企画しています。

2018男女平等推進フォーラム　9/29（土）▶30（日）

講　演　会

心揺さぶる珠玉の音色—知られざる女性作曲家の世界—

日　時：9月30日（日）　入場無料
　　午後2時開演　午後1時30分開場
会　場：ミレニアムホール（生涯学習センター2階）
講　師：小林　緑さん（国立音楽大学名誉教授）
演奏者

ピアノ
佐野 隆哉さん

ヴァイオリン
佐藤 久成（ひさや）さん

チェロ
江口 心一さん

ワークショップ 作品展示

29日（土）午前10時〜午後4時／30日（日）午前9時30分〜12時
場　所：男女平等推進プラザ「はばたき21」
　　（生涯学習センター4階）